

祈禱抄

文永九年

五一歳

本朝沙門 日蓮 撰

問うて云はく、華嚴宗・法相宗・三論宗・小乗の三宗・真言宗・天台宗の祈りをなさんといづれかしらあるべきや。答へて云はく、仏説なればいづれも一往は祈りとなるべし。但法華經をもていのらむ祈りは必ず祈りとなるべし。問うて云はく、其の所以は如何。答へて云はく、二乗は大地微塵劫を經て先四味の經を行ずとも成仏すべからず。法華經は須臾の間此を聞いて佛になれり。若し爾らば舍利弗・迦葉等の千二百・万二千、総じて一切の二乗の佛は、必ず法華經の行者の祈りをかなふべし。又行者の苦にもかわるべし。故に信解品に云はく、「世尊は大恩まします。希有の事を以て憐愍教化して我等を利益したまふ。無量億劫にも誰か能く報ずる者あらん。手足をもつて供給し、頭頂もつて礼敬し、一切をもつて供養すとも皆報ずることを能はず。若しは以て頂戴し、兩肩に荷負して恒沙劫に於て心を尽くして恭敬し、又美膳・無量の宝衣及び諸の臥具種々の湯薬を以てし、牛頭梅檀及び諸の珍宝を以て塔廟を起て宝衣を地に布き、斯くの如き等の事以て供養すること恒沙劫に於てすとも亦報ずること能はじ」等云。此の經文は、四大声聞が譬喩品を聴聞して佛になるべき由を心得て、佛と法華經との恩の報じがたき事を説けり。されば二乗の御為には此の經を行ずる者をば、父母よりも愛子よりも兩眼よりも身命よりも大事にこそおぼしめすらめ。舍利弗・目連等の諸大聲聞は一代聖教いづれも讚歎せん行者を、すておぼす事は有るべからず。は思へども、爾前の諸經はすこしうらみおぼす事も有るらん。「佛法の中に於て已に敗種の如し」など、かにいまして給ひし故なり。今の幸華光如来・名相如来・普明如来などならせ給ひたる事はおほざる外の幸ひなり。例せば崑崙崙崙山のくづれて宝の山に入りたる心地してこそおはしぬらめ。されば領解の文に云はく、「無上の宝珠求めざるに自づから得たり」等云。

されば一切の二乗界、法華經の行者をまぼり給はん事は疑ひあるべからず。あやしの畜生なども恩をば報ずる事に候ぞかし。かりと申す鳥あり、必ず母の死なんとする時孝をなす。狐は塚を跡にせず。畜生すら猶此くの如し。況んや人類をや。されば王寿と云ひし者道を行きしに、うえつかれたりしに、路の辺に梅の樹あり、其の実多し、寿とりて食してうへやみぬ。我此の梅の實を食して氣力をます。其の恩を報ぜずんばあるべからずと申して、衣をぬぎて梅に懸けてさりぬ。王尹と云ひし者は道を行くに水に渴しぬ。河をすぐるに水を飲んで錢を河に入れて是を水の直とす。竜は必ず袈裟を懸けたる僧を守る。佛より袈裟を給びて竜宮城の愛子に懸けさせて、金翅鳥の難をまぬかる、故なり。金翅鳥は必ず父母孝養の者を守る。竜は須弥山を動かして金翅鳥の愛子を食す。金翅鳥は必ず父母孝養の者を守る。父母の孝養をなす者、僧のとりさるばるを須弥の頂にきて竜の難をまぬかる、故なり。天は必ず戒を持ち善を修する者を戒を守り。人間界に生ず。修羅多勢なれば、をぎりなして必ず天をかす。人間界に戒を持ち善を修するの者多ければ、戒に戒を持ち善を修する者をば天多ければ修羅をそれをなして天をかさず。故に戒を持ち善を修する者をば天必ず之を守る。何に況んや二乗は六凡より戒徳も勝れ智慧賢き人々なり。天必でか我が成仏を遂げたらん法華經を行ぜん人をば捨つべきや。

又一切の菩薩並びに凡夫は仏にならんがために、四十余年の経々を無量劫が間行ぜしかども仏に成る事なかりき。而るを法華經を行じて仏と成りて、今十方世界におはします。仏々の三十二相八十種好をそなへさせ給ひて九界の衆生にあをがれて、月を星の回れるがごとく、須弥山を八山の回るが如く、日輪を四州の衆生の仰ぐが如く、輪王を万民の仰ぐが如く、仰がれさせ給ふは法華經の恩徳にあらずや。されば仏は法華經に誠めて云はく「復舍利を安んずることを須ひざれ」と。

涅槃經に云はく「諸仏の師とする所は所謂法なり。是の故に如来恭敬供養す」等云云。法華經には我が舍利を法華經に並ぶべからず。涅槃經には諸仏は法華經を恭敬供養すべしと説かせ給へり。仏此の法華經をさとりて仏に成り、しかも人に説き聞かせ給はずば仏種をたせ給ふ失あり。此の故に釈迦如来は此の娑婆世界に出でて説かんとせさせ給ひしを、元品の無明と申す第六天の魔王が一切衆生の身に入りて、仏をあだみて説かせまいらせじとせしなり。所謂波瑠璃王の五百人の釈子を殺し、鶯掘魔羅が仏を追ひ、提婆が大石を放ち、旃遮婆羅門女が鉢を腹にふせて仏の御子と云ひし、婆羅門城には仏を入れ奉る者は五百兩の金をひき、されば道にはうばらをたて、井には糞を入れ、門にはさかむぎをひけり、食には毒を入れし、皆是仏をにくむ故に。華色比丘尼を殺し、目連は竹杖外道に殺され、迦留陀夷は馬糞に埋れし、皆仏をあだみし故なり。而れども仏さまごまの難をまぬかれて御年七十二歳、仏法を説き始められて四十二年と申せしに、中天竺王舎城の丑寅、耆闍崛山と申す山にして、法華經を説き始められて八年まで説かせ給ひて、東天竺俱尸那城、跋提河の辺にして御年八十と申せし、二月十五日の夜半に御涅槃に入らせ給ひき。而りといへども御悟りをば法華經と説きかせ給へば、此の經の文字は即釈迦如来の御魂なり。一々の文字は仏の御魂なれば、此の經を行ぜん人をば釈迦如来我が御眼の如くまぼり給ふべし。人の身に影のそへるがごとくそはせ給ふらん。いかでか祈りとならせ給はざるべき。

一切の菩薩は又始め華嚴經より四十余年の間、仏にならんと願ひ給ひしかどもかなはずして、法華經の方便品の略開三顯一の時「仏を求むる諸の菩薩、大数八万有り。又諸の万億国の転輪聖王の至れる、合掌して敬心を以て具足の道を聞かんと欲す」と願ひしが、広開三顯一を聞いて「菩薩是の法を聞いて疑網皆已に断ちぬ」と説かせ給ひぬ。其の後自界他方の菩薩雲の如く集まり、星の如く列なり給ひき。宝塔品の時、十方の諸仏各々無辺の菩薩を具足して集まり給ひき。文殊は海より無量の菩薩を具足し、又八十万億那由他の諸菩薩、又過八恒河沙の菩薩、地涌千界の菩薩、分別功德品の六百八十万億那由他恒河沙の菩薩、又千倍の菩薩、復一世界の微塵数の菩薩、復三千大千世界の微塵数の菩薩、復二千中国土の微塵数の菩薩、復小千国土の微塵数の菩薩、復四天下の微塵数の衆生、薬王品の八万四千の菩薩、妙音品の八万四千の菩薩、復八世界微塵数の衆生、薬王品の八万四千の菩薩、陀羅尼品の六万八千人、妙莊嚴王品の八万四千人、勸発品の恒河沙等の菩薩、三千大千世界微塵数等の菩薩、此等の菩薩を委しく数へば、十方世界の微塵の如し。十方世界の草木の如し。十方世界の星の如し。十方世界の雨の如し。此等は皆法華經にして仏にならせ給ひて、此の三千大千世界の地上・地下・虚空の中にまします。迦葉尊者は鷄足山にあり、文殊師利は清涼山にあり、地藏菩薩は迦羅陀山にあり、観音は補陀落山にあり。弥勒菩薩は兜率天に、難陀等の無量の竜王・

阿修羅王は海底海畔にあり。帝釈は・利天に、梵王は有頂天に、摩醯修羅は第六の他化天に、四天王は須弥の腰に、日月衆星は我等が眼に見えて頂上を照らし給ふ。江神・河神・山神等も皆法華經の会上の諸尊なり。

仏、法華經をとかせ給ひて年数二千二百余年なり。人間こそ寿命も短き故に、仏をも見奉り候人も侍らね。天上は日数は永く寿命も長ければ、併ら仏をおがみ法華經を聴聞せる天人かぎり多くおはするなり。人間の五十年は四王天の一日一夜なり。此の一日一夜をはじめとして三十日は一月、十二月は一年にして五百歳なり。されば人間の二千二百余年は四王天の四十四日なり。されば日月並びに毘沙門天王は仏におくれたてまつりて四十四日、いまだ二月にたらず。帝釈・梵天などは仏におくれ奉りて一月一時にもすぎず。わずかの間にいかでか仏前の御誓ひ、並びに自身成仏の御經の恩をばわすれて、法華經の行者をば捨てさせ給ふべきなど思ひつらぬればたのもしき事なり。

されば法華經の行者の祈る祈りは、響の音に応ずるがごとし。影の体にそえるがごとし。すめる水に月のうつるがごとし。方諸の水をまねくがごとし。磁石の鉄をすうがごとし。琥珀の塵をとるがごとし。あきらかなる鏡の物の色をうかぶるがごとし。世間の法には我がおもはざる事も、父母・主君・師匠・妻子・をろかならぬ友なんどの申す事は、恥ある者は意にはあはざれども、名利をうしなひ、寿ともなる事も侍るぞかし。何に況んや我が心からおこりぬる事は、父母・主君・師匠なんどの制止を加ふれどもなす事あり。

さればはんよきと云ひし賢人は我が頸を切りてだにこそ、けいかと申せし人には与へき。季札と申せし人は、約束の劍を徐の君が塚の上に懸けたりき。而るに靈山会上にして即身成仏せし竜女は、小乘經には五障の雲厚く三従のきずな強しと嫌はれ、四十余年の諸大乘經には或は歴劫修行にたへずと捨てられ、或は「初発心の時便ち正覚を成ず」の言も有名無実なりしかば、女人成仏もゆるさざりしに、設ひ人間天上の女人なりとも成仏の道には望みなかりしに、竜畜下賤の身たるに女人とだに生まれ、年さへいまだたけず、わずかに八歳なりき。かたがた思ひもよらざりに、文殊の教化によりて海中にして法師・提婆の中間、わづかに宝塔品を説かれし時刻に、仏になりたりし事はありがたき事なり。一代超過の法華經の御力にあらずばいかでかかくは候べき。

されば妙樂は「行は浅く功は深し以て経力を顕はす」とこそ書かせ給へ。竜女は我が仏になれる経なれば仏の御諫めなくとも、いかでか法華經の行者を捨てさせ給ふべき。されば自讚歎仏の偈には「我大乘の教へを聞いて苦の衆生を度脱せん」等とこそ、すまさせ給ひしか。竜女の誓ひは其の所従の一口の宣ぶる所に非ず、心の測るに非ず「一切の竜畜の誓ひなり。娑竭の竜王は竜畜の身なれども、子を念ふ志深かりしかば、大海第一の宝如意宝珠をもむすめにとらせ、即身成仏の御布施にせさせつれ。此の珠は直三千大千世界にかふる珠なり。

提婆達多は師子頰王には孫、釈迦如来には伯父たりし斛飯王の御子、阿難尊者の舎兄なり。善聞長者のむすめの腹なり。転輪聖王の御一門、南閻浮提には賤しからざる人なり。在家にましまし、時は、夫妻となるべきやすたら女を悉達太子に押し取られ、宿世の敵と思ひしに、出家の後、人天大会の集まりたりし時、仏に汝は癡人、唾を食らへる者とのられし上、名聞利養深か

りし人なれば、仏の人にもてなされしをそねみて、我が身には五法を行じて
仏より尊げになし、鉄をのして千輻輪につけ、螢火を集めて白毫となし、六
万宝蔵・八万宝蔵を胸に浮かべ、象頭山に戒場を立て多くの仏弟子をさそひ
とり、爪に毒を塗り仏の御足をぬらむと企て、蓮華比丘尼を打ち殺し、大石
を放つて仏の御指をあやまちぬ。具に三逆を犯し、結句は五天竺の悪人を集
め、仏並びに御弟子檀那等にあだをなす程に、頻婆沙羅王は仏の第一の御檀
那なり。一日に五百輛の車を送り、日々に仏並びに御弟子を供養し奉りき。
提婆そねむ心深くして阿闍世太子を語らひて、父を終に一尺の釘七つをもて
はりつけになし奉りき。終に王舎城の北門の大地破れて阿鼻大城に墮ちにき。
三千大千世界の一人も是を見ざる事なかりき。されば大地微塵劫は過ぐる
とも無間大城をば出づべからずとこそ思ひ候に、法華經にして天王如来とな
らせ給ひけるにこそ不思議に尊けれ。提婆達多、仏になり給はば、語らはれ
し所の無量の悪人、一業所感なれば皆無間地獄の苦ははなれぬらん。是偏に
法華經の御徳なり。されば提婆達多並びに所従の無量の眷属は法華經の行者
の室宅にこそ住まはせ給ふらめとたのもし。

諸の大地微塵の如くなる諸菩薩は等覺の位までせめて、元品の無明計りも
ちて侍るが、釈迦如来に値ひ奉りて元品の大石をわらんと思ふに、教主釈尊
四十余年が間は「因分は説くべし、果分は説くべからず」と申し、妙覺の
功徳を説き顯はし給はず。されば妙覺の位に登る人一人もなかりき。本意な
かりし事なり。而るに靈山八年が間に「唯一仏乗を名づけて果分と為す」と
説き顯はし給ひしかば、諸の菩薩皆妙覺の位に上りて、釈迦如来と悟り等し
く須弥山の頂に登りて四方を見しが如く、長夜に日輪の出でたらんが如く、
あかなくならせ給ひたりしかば、仏の仰せ無くとも法華經を弘めじ、又行者
に替はらじとは、おぼしめすべからず。されば「我身命を愛せず但無上道を
惜しむ」―「身命を惜しまず」―「当に広く此の經を説くべし」等とこそ誓ひし
給ひしか。其上慈父の釈迦仏、悲母の多宝仏、慈悲の父母等、同じく助証
の十方の諸仏、一座に列ならせ給ひて、月と月とを集めたるが如く、日と日
とを並べたるが如く、今諸の大衆に告ぐ、我が滅度の後誰か能く
此の經を護持し読誦せんものなる。今仏前に於て自ら誓言を説け」と三度ま
で諫めさせ給ひしに、八方四百万億那由他の国土に充滿せさせ給ひし諸大菩
薩、身を曲げ、低頭合掌し、俱に同時に声をあげて「世尊の勅の如く当に具
に奉行したてまつるべし」と三度まで声を惜しまずよばわりしかば、いかで
か法華經の行者にはかはらせ給はざるべき。

はんよきと云ひしものけいかに頭を取らせ、きさつと云ひしもの徐の君が
塚に刀をかけし、約束を違へじがためなり。此等は震旦辺土のえびすの如く
なるものどもだにも、友の約束に命をも亡ぼし、身に代へて思ふ刀をも塚に
懸くるぞかし。まして諸大菩薩は本より大悲代受苦の誓ひ深し。仏の御諫め
なしともいかでか法華經の行者を捨て給ふべき。其上我が成仏の經たる上、
仏慇懃に諫め給ひしかば、仏前の御誓ひ丁寧なり。行者を助けたまふ事疑ふ
べからず。

仏は人天の主、一切衆生の父母なり。而も開導の師なり。父母なれども賤
しき父母は主君の義をかねず。主君なれども父母ならざれば、おそろしき辺
もあり。父母・主君なれども、師匠なる事はなし。諸仏は又世尊にてまし
せば、又「主君にてはましませども、娑婆世界に出でさせ給はざれば師匠にあ
らず。又「其の中の衆生は悉く是吾が子なり」とも名乗らせ給はず。釈迦仏独

り主師親の三義をかね給へり。しかれども四十余年の間は提婆達多を罵り給ひ、諸の声聞をそしり、菩薩の果分の法門を惜しみ給ひしかば、仏なれどもよりよりは天魔波旬ばしの我等をなやますかの疑ひ、人にはいはずれども心の中に思ひしなり。此の心は四十余年より法華經の始まるまで失せず。而るを靈山八年の間に宝塔虚空に現じ、二日月の如く並び、諸仏大地に列なり。大を山八年の間に宝塔虚空に現じ、二日月の如く並び、諸仏大地に列なり。て、諸仏の果分の功德を吐き給ひしかば、宝蔵をかたぶけて貧人にあたり給ひ。がごとく、崑崙山の功徳を吐き給ひたりき。諸人此の玉をのみ拾ふが如く此の八箇年が間、珍しく貴き事心髓にもとりしかば、諸菩薩身命も惜しまず。言をはぐくまず、誓ひをなせし程に、嘱累品にして釈迦如来宝塔を出でさせ給ひて、とびらを押したたて給ひしかば、諸仏は国々へ返り給ひき。諸の菩薩等も諸仏に随ひ奉りて返らせ給ひぬ。

やうやく心ぼそくなりし程に「却後三月当に般涅槃すべし」と唱へさせ給ひし事こそ心ぼそく耳をどろかしかりしかば、二乘人天等ことごとく法華經を聴聞して仏の恩徳心肝にそみて、身の如く若し涅槃せさせ給はゞ、いかに見せまいらせんと思ひしに、仏の仰せの如く御年満八十と申せし二月十日の寅卯の時、東天竺舍衛国俱尸城跋提河の辺にして仏御入滅なるべき由の御音、上は有頂、横には三千大千界までひびきたりしこそ、目もくれんもきえはてぬれ。五天竺・十六の大国・五百の中国・十千の小国・無量の粟散国等の衆生、一人も衣食を調へず、上下をきらはず、牛馬・狼狗・鷲・蚊・蛇等の五十二類の一人も衣食を調へず、最後の供養とあてがひき。一切衆生の父母・主君・師匠を橋をねんとす、なんど申すこえひびきし。かば、身の毛のいよ立つのみならず涙を流す。なんだを流すのみならず、頭をたき胸ををさへ音も惜しまず叫びしかば、血の涙・血のあせ・俱尸那城に大雨よりしかば、仏の恩の報じがたき多く流れたりき。是偏に法華經にして仏になりしかば、仏の恩の報じがたき故なり。

かゝるなげきの庭にても、法華經の敵をば舌をきるべきよし、座につらなりし人々のしり侍りき。迦葉童子菩薩は法華經の敵の国には霜電となるべしと誓ひ給ひき。爾の時仏は臥よりきてよるこばせ給ひて、善哉善哉と讚め給ひき。諸菩薩は仏の御心を推して法華經の敵をうたんと申さば、しばらくも、いき給ひなんと思ひて一々の誓ひはなせしなり。されば諸菩薩・諸天人等は法華經の敵の出来せよかし、仏前の御誓ひはたして、釈迦尊並びに多宝・諸仏如来にも、げに仏前にして誓ひしが如く、法華經の御ためには名をも身命をも惜しまざりけりと思はれまいらせんとこそおぼすらめ。

いかに申す事はそきやらん。大地はさ、ばはづるとも、虚空をつなぐ者はいかに申す事はそきやらん。大地はさ、ばはづるとも、虚空をつなぐ者はありとも、潮のみちひぬ事ありとも、日は西より出づるとも、法華經の行者を諸の菩薩・人天・八部等の二聖・二天・十羅刹等、千に一も来たりてまぼり給はぬ事侍らば、上は釈迦諸仏をなづり奉り、下は九界をたぼりかす失あり。行者は必ず不実なりとも智慧はをろかなりとも身は不浄なりとも戒徳は備へずとも南無妙法蓮華經と申さば必ず守護し給ふべし。袋きたなしとて金を捨つる事なかれ、伊蘭をにくまば梅檀あるべからず。谷の池を不浄なりと嫌はゞ蓮を取るべか

らず。行者を嫌ひ給は、誓ひを破り給ひなん。正像既に過ぎぬれば持戒は市中の虎の如し。智者は麟角よりも希ならん。月を待つまでは灯を憑むべし。宝珠のなき処には金銀も宝なり。白鳥の恩をば黒鳥に報ずべし。聖僧の恩をば凡僧に報ずべし。とくとく利生をさづけ給へと強盛に申すならば、いかでか祈りのかなはざるべき。

問うて云はく、上にか、せ給ふ道理文証を拜見するに、まことに日月の天におはしますならば、大地に草木のおふるならば、昼夜の国土にあるならば、大地だにも反覆せずば、大海のしほだにもみちひるならば、法華経を信ぜん人現世のいのり後生の善処は疑ひなかるべし。然りと雖も此の二十余年が間の天台・真言等の名匠、多く大事のいのりをなすに、はかばかしくいみじきいのりありともみえず。尚外典の者どもよりも、つたなきやうにうちおぼへて見ゆるなり。恐らくは経文のそらごととなるか、行者のをこなひのおろかなるか、時機のかなはざるかとうたがはれて後生もいかなとをぼう。

それはさておきぬ。御房は山僧の御弟子とうけ給はる。父の罪は子にか、り、師の罪は弟子にか、るとうけ給はる。叡山の僧徒の園城山門の堂塔・佛像・経巻数万をやきはらへ給ふが、ことにおそろしく、世間の人々もさわぎうとみあへるはいかに。前にも少々うけ給はり候ひぬれども、今度くわしくき、ひらき候はん。但し不審なることは、かゝる悪僧どもなれば、三宝の御意にもかなはず、天地にもうけられ給はずして、祈りも叶はざるやらんとをばへ候はいかに。答へて云はく、せんぜんも少々申しぬれども、今度又多くの人、口に罪業をつくる。先づ山門はじまりし事は此の国に仏法渡りて二百余年、桓武天皇の御宇に伝教大師立て始め給ひしなり。当時の京都は昔聖徳太子、王の氣ありと相し給ひしかども、天台宗の渡らん時を待ち給ひし間、都をたて給はず。又上宮太子の記に云はく「我が滅度二百余年に仏法日本に弘まるべし」云云。伝教大師、延暦年中に叡山を立て給ふ。桓武天皇は平の京都をたて給ひき。太子の記文たがはざる故なり。されば山門と王家とは松と柏とのごとし、蘭と芝とにたり。松かるれば必ず柏かれ、らんしぼめば又しぼしむ。王法の榮へは山の悦び、王位の衰へは山の歎きと見えしに、既に世関東に移りし事なにとか思し食しけん。

秘法四十一人の行者、承久三年辛巳四月十九日京夷乱れし時、関東調伏の為、隠岐法皇の宣旨に依つて始めて行はれし御修法十五壇の秘法

- 一字金輪法
- 四天王法
- 不動明王法
- 大威徳法
- 転輪聖王法
- 十壇大威徳法

- 天台座主慈円僧正。伴僧十二口。関白殿基通の御沙汰。
- 成興寺の宮僧正。伴僧八口。広瀬殿に於て修明門院の御沙汰。
- 成宝僧正。伴僧八口。花山院禅門の御沙汰。
- 観嚴僧正。伴僧八口。七条院の御沙汰。
- 成賢僧正。伴僧八口。同院の御沙汰。
- 伴僧六口、覚朝僧正。俊性法印。永信法印。豪円法印。猷円僧都。慈賢僧正。
- 賢乗僧都。仙尊僧都。行遍僧都。実覚法眼。已上十人大旨本坊に於て之を修す。
- 妙高院僧正。伴僧八口。宜秋門院の御沙汰。
- 常住院僧正。三井。伴僧六口。資賃の御沙汰。

- 如意輪法
- 毘沙門法
- 御本尊一日之を造らせらる。
- 調伏の行儀は
- 如法愛染王法

仁和寺御室の行法。五月三日之を始めて紫宸殿に於て二七日之を修せらる。

六 染 字 法
愛 動 王 法
不 威 德 法
大 剛 童子 法
金 剛 童子 法

尊 星 王 法
太 元 法
五 壇 法
守 護 經 法

太政僧正。三七日之を修す。
快雅僧都

觀嚴僧正七日之を修す
勸修寺の僧正。伴僧八口。皆僧綱。

安芸僧正
同人

已上十五壇法了んぬ。五月十五日伊賀太郎判官光季京にして討たれ、同十九日鎌倉に聞こえ、同二十一日大勢の軍兵上ると聞こえしかば残る所の法六月八日之を行なひ始めらる。

覺朝僧正

藏有僧都

太政僧正。永信法印。全尊僧都。猷円僧都。行遍僧都。

御室之を行なはせる我が朝二度之を行ふ。

五月二十一日武藏守殿海道より上洛し甲斐源氏は山道を上る、式部殿は北陸道を上り給ふ。六月五日大津をかたむる手、甲斐源氏に破られ畢んぬ。同六月十三日十四日宇治橋の合戦、同十四日京方破られ畢んぬ。同十五日に武藏守殿六条へ入り給ふ。諸人入り畢んぬ。七月十一日に本院は隱岐国へ流され給ひ、中院は阿波国へ流され給ひ、第三院は佐渡国へ流され給ふ。殿上人七人誅殺せられ畢んぬ。

かゝる大悪法、年を経て漸々に関東に落ち下りて、諸堂の別当供僧となり連々と之を行なふ。本より教法の邪正勝劣をば知ろし食さず。只三宝をばあがむべき事とばかりおぼしめす故に、自然として是を用ひきたれり。関東の国々のみならず、叡山・東寺・園城寺の座主・別当、皆関東の御計らひと成りぬる故に、彼の法の檀那と成り給ひぬるなり。

問うて云はく、真言の教を強ちに邪教と云ふ心如何。答へて云はく、弘法大師云はく、第一大日経・第二華嚴経・第三法華経と、能く能く此の次第を案ずべし。仏は何なる経にか此の三部の経の勝劣を説き判じ給へるや。若し第一大日経・第二華嚴経・第三法華経と説き給へる経あるならば尤も然るべし。其の義なくんば甚だ以て依用し難し。法華経に云はく「薬王今汝に告ぐ、我が所説の諸経而も此の経の中に於て法華最も第一なり」云云。仏正しく諸経を挙げて其の中に於て法華第一と説き給ふ。仏の説法と弘法大師の筆とは水火の相違なり。尋ね究むべき事なり。此の筆を数百年が間、凡僧・高僧是を学し、貴賤・上下是を信じて、大日経は一切経の中に第一とあがめける事、仏意に叶はず。心あらん人は能く能く思ひ定むべきなり。若し仏意に相叶はぬ筆ならば、信ずとも豈成仏すべきや。又是を以て国土を祈らん、当に不祥を起さざるべきや。又云はく「震旦の人師等諍つて醍醐を盗む」云云。文の意は天台大師等真言教の醍醐を盗みて法華経の醍醐と名づけ給へる事は、此の筆最第一の勝事なり。法華経を醍醐と名づけ給へる事は、天台大師涅槃経の文を勘へて、一切経の中には法華経を醍醐と名づくこと判じ給へり。真言教の天竺より唐土へ渡る事は、天台出世の以後二百余年なり。されば二百年の後に渡るべき真言の醍醐を盗みて、法華経の醍醐と名づけ給ひけるか。此の事不審なり、不審なり。真言未だ渡らざる以前の二百余年の人々を盗人とかき給へる事証拠何れぞや。弘法大師の筆をや信ずべき、涅槃経に法華経を醍醐と説けるをや信ずべき。若し天台大師盗人ならば、涅槃経の文をば云何がこゝろすべき。さては涅槃経の文真実にして、弘法の筆邪義ならば、

邪義の教を信ぜん人々は云何。只弘法大師の筆と仏の説法と勘へ合はせて、正義を信じ侍るべしと申す計りなり。

疑つて云はく、大日経は大日如来の説法なり。若し爾らば釈尊の説法を以て大日如来の教法を打ちたる事、都て道理に相叶はず如何。答へて云はく、大日如来は何なる人を父母として、何なる国に出で、大日経を説き給ひけるやらん。もし父母なくして出世し給ふならば、釈尊入滅以後、慈尊出世以前、五十六億七千万歳が中間に、仏出でて説法すべしと云ふ事何なる経文ぞや。若し証拠なくんば誰の人か信ずべきや。かゝる僻事をのみ構へ申す間、邪教とは申すなり。其の迷謬尽くしがたし。纔か一二を出だすなり。加之並びに禅宗・念仏等を是を用ひる。此等の法は皆未顕真実の権教、不成仏の法、無間地獄の業なり。彼の行人又謗法の者なり。争でか御祈祷叶ふべきや。然るに国主と成り給ふ事は、過去に正法を持ち仏に仕ふるに依つて、大小の王皆梵王・帝釈・日月・四天等の御計らひとして郡郷を領し給へり。所謂経に云はく「我今五眼をもつて明らかに三世を見るに、一切の国王皆過去世に五百の仏に侍するに由つて帝王の主と為ることを得たり」等云云。然るに法華經を背きて、真言・禅・念仏等の邪師に付いて、諸の善根を修せらるゝとも敢へて仏意に叶はず、神慮にも違する者なり。能く能く案じあるべきなり。

人間に生を得る事、都て希なり。適生を受けて、法の邪正を極めて未来の成仏を期せざらん事、返す返す本意に非ざる者なり。又慈覚大師御入唐以後、本師伝教大師に背かせ給ひて、叡山に真言を弘めんが為に御祈請ありしに、日を射るに日輪動転すと云ふ夢想を御覧じて、四百余年の間、諸人は是を吉夢と思へり。日本国は殊に忌むべき夢なり。殷の紂王、日輪を的にして射るに依つて身亡びたり。此の御夢想は権化の事なりとも能く能く思惟あるべきか。仍つて九牛の一毛詮する所件の如し。